

存在に神は見出せるか

——上田圭委子著『ハイデガーにおける存在と神の問題』

合評会について

齋藤 元紀（高千穂大学）

近年陸続と刊行されるハイデガー哲学の研究書のなかでも、ひととき目を引く浩瀚な書物が 2021 年に刊行された。上田圭委子著『ハイデガーにおける存在と神の問題』（アスパラ）がそれである。本書は、マルティン・ハイデガーの思索の核心を他ならぬ「存在」と「神」の関係性に見定め、修学時代から最晩年に至るその歩みを「真理」を軸に精緻に読み解くことで、将来の哲学的思索のあり方をも問なおそうとする意欲作である。

本書の第一部はハイデガーの思想形成を時系列的に追ういわゆる発展史的考察により構成されており、それら諸段階を背景に各重要著作や講義の要点が押さえられている点でも有用だが、第二部では『哲学への寄与』を中心にハイデガー存在論の構造と内実が分析され、第三部ではさらにヘルダーリン解釈を挟みつつ、『哲学への寄与』から『ヒューマニズム書簡』への歩みが考察されている。そしてこれらの考察をとおしてハイデガー存在論のなかでも複雑極まる「神」の問題へと分け入っている点に、やはり本書の最大の特徴を認めることができる。

「由来の信仰との対決」を「棘」と呼び、また「思考それ自体が、信仰に対する裂け目なのである」とも述べているところからも明らかなように、哲学上や神学上のみならず、何より信仰上も「神」はハイデガーにとって大きな緊張をはらんだ問題であり続けた¹。ハイデガー存在論を究明するにあたり、「神」の究明は避けては通れない課題なのである。本書はこの課題に正面から切り込み、周到かつ緻密な哲学的・神学的考察をとおして、存在と神が切り結ぶ秘められた関係を浮かび上がらせようと試みている。

本書をめぐって、ハイデガー研究会では 2023 年より合評会の企画が進み、2024 年 7 月 21 日にハイデガー研究会特別企画として、対面（高千穂大学セントラルスクエア（6 号館）2F・タカチホホール）と Zoom オンラインのハイブリッド形式による合評会が開催された。上田圭委子氏による著者あいさつ・自著紹介を皮切りに、古荘真敬氏（東京大学）、山本英輔氏（金沢大学）、陶久明日香氏（学習院大学）の順で登壇者からのコメントがなされ、最後にフロアとの質疑が行われた。司会は齋藤元紀が務め、参加者は 60 名を超えた。

¹ Martin Heidegger / Karl Jaspers, *Briefwechsel 1920-1963*, Walter Biemel und Hans Saner (Hrsg.), Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., Piper, München; Zürich 1990, S. 157; Martin Heidegger, *Anmerkungen I-V (Schwarze Hefte 1942-1948)*, Gesamtausgabe, Bd. 97, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 2015, S. 199.

以下では、各登壇者から寄せられたコメントのなかでも重要と思われる点に言及しておきたい。古荘真敬氏は、本書における存在と神の問題に対して、三つの問いを掲げている。第一は「*das Seyn west als das Ereignis*」の理解について、第二はピュシス概念と存在者全体との関係について、そして第三は存在と愛の関係についてである。いずれも「存在が与えられていること」といういわば「存在の贈与」の問題系を主軸としているが、わけても第三の問いは「存在の働き」と「悪」の関係に立ち入ることで、本書の「神」の理解に対する根本的な問いを投げかけている。

次いで山本英輔氏は、本書第二部と第三部に焦点をあて、存在の真理、転回、神の顕れといった諸点の理解について問うている。真理における「秘匿」の強調の変化と「最後の神」の顕現との関係、そしてピュシス概念との関係性は、古荘氏の問いとも重なる点であり、きわめて興味深い。わけても山本氏は「根源的倫理」の概念に寄せて、その具体的な行為の選択の難しさを指摘しつつ、「良心の呼び声」の再解釈をさらに拡張しうる可能性を提起している。

そして陶久明日香氏は、「顕現しがたいもの」をめぐる論じ方について、また「*Exsistenz* としての現存在と *Element* としての存在」の理解について、そして「根源的倫理の実現について」という三点にわたって問いを提示している。第一の問いは「聖なるもの」と「奥深い存在」の分析方法に焦点をあてて本書の考察の立場に対するさらに高次の反省的視点を提起するものであり、また第二の問いは *Element* 概念の理解に対する疑問を投げかけるものと言えるだろう。第三の問いは、山本氏の問いにもかかわるが、陶久氏が「良心の呼び声」よりもむしろ「詩人」の存在をどう理解すべきかに焦点をあてている点は興味深い。

上記の登壇者からの問いに加えて、当日は対面・オンラインを問わずフロアの参加者からも多くの問いが投げかけられ、上田氏からも丁寧な応答がなされた。予定時間を超過し、全4時間以上に及ぶ合評会となったが、それでもなお議論が尽くされていない部分もあったため、本書の狙いとあわせて、とくに登壇者のコメントに対する応答を上田氏にご寄稿いただいた。上田氏の応答には、存在と神をめぐり、私たちの思考をさらに押し広げるさまざまな道が開かれている。存在に神は見いだせるか。本書ならびに登壇者コメントとあわせて上田氏の応答を味読いただき、この問いについてのさらなる思考を深めていただければと思う。

Motoki SAITO
Introduction